九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

郭象の『荘子注』について

黄，錦鋐
台湾師範大学

連，清吉
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/18117

出版情報：中国哲学論集. 16, pp.1-7, 1990-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

郭象の『荘子注』について

黄　錦鋐
連　清吉譯

一

郭象は字は子玄、河南の人。晋書の郭象傳を[1]みてみますと、彼一生の前半の生活はひたすら老荘を専攻し、しばしば朝廷から招かれますが、出仕を肯んぜずして、隠逸の士のように生きます。しかし、その後、彼はチャンスを得て、太傅の主簿となり、才能を発揮することになります。やがて重要な地位にもつき権力もにぎって、内外に高名にもなりますので、彼の出仕以後の生活は非常に快適であったと考えられます。これによって、たくさんの人が彼の前後の全く違った生活ぶりを慨嘆しながら批判します。例えば、晋書本伝は彼が権力をにぎった後、「もともとの主張を全て捨て去った」といいます。また、彼の友人である庾敳も彼が太傅の主簿となったのち、慨嘆して、「あなたは世の中の役にたつ人物ですが、私の先きの日の思いは全くなくなりました」[2]といっています。しかし、もしわれわれが綜合的に郭象の前後異った生活がなぜそうだったのかを研究したならば、彼が老荘思想を専攻して、隠逸的な生活を過したのもただ将来出仕するための準備であったに過ぎないことを容易に見出すであろうと思います。つまり、郭象は荘子の思想を通じて、彼自身の政治理論をそこに見出したのです。いいかえると、老荘研究は原因や手段であり、要路で権力をにぎることこそ、かれの結果であり、目的だったのです。従って、後の人は郭象の素行が悪いと批判するが、彼が向秀の『荘子注』をぬすんで自分の作品として使ったこと以外には、決して郭象の素行の悪さを指摘してはいません。そこで、もし、われわれが、彼は老荘研究を手段として利用しながら政治的

な目的を達成したと説いて、彼の素行の悪さの例証としたならば、それは十分に適切なことであると思います。

二

『荘子注』は郭象の政治思想の成果というべきものです。文士伝では、郭象が『荘子注』を作り、最も「清辞遒旨」であるといいます。「遒旨」というのは、文章に説得力があるという意味です。換言すれば、そこには色濃く彼自身の見解が示されているということです。郭象は『荘子』の字句の解釈については、余り気をつけていません。例えば、「鯤、鵬の実態は私はまだ詳らかにしません」[3]などとあります。しかし、荘子の思想内容に対しては、大いに真義を発揮しました。そして、発揮した真義は彼の政治思想の根拠となりました。では、いったい彼の政治思想の根拠とはどのようなものでしょうか。まず、彼の「逍遙遊」篇の注についてみてみましょう。

夫荘子之大意、在乎逍遙遊放、無為而自得。故極小大之致、以明性分之適。達観之士、宜要其會帰而遺其所寄、不足事事曲与生説、自不害其弘旨、皆可略之耳[4]

これは『荘子注』の全体要旨であり、もっとも説得力のあるところといえます。また、荘子の大意を「無為而自得」にほかならないともいっております。「無為」とは「小大の旨を極める」ことをいい、「自得」とは「性分に適る」ことといいます。これは全て『荘子注』の大意であります。もちろん郭象自身の見解を提出したものであります。ところが郭象は自分の見方を提出しながら、一方では他人に誤解されること、もしくは他人に反対されることを恐れておりました。そこで「烱眼の士は荘子の本旨をもとめて、荘子の理由づけは遺てたほうがよい、種種のことを曲げて荘子に従う必要がない」ともいうのです。

もともと『荘子』の篇章はたくさんあります。しかし郭象はその一部を「偏狭な見解を持った者は荘子の宏大な趣旨に通じることができず、しかもみだりに奇怪な説に竄入する」[5]という見方をとって、あるものは『山海経』のようなものであり、あるものは『占夢書』のようなものであって、これは荘子の本義に合わないからとして、これらをすべて刪除して、今本の三十三篇『荘子』に編成したわけです。この三十三篇の内容はもちろん郭象の「荘子

のことづけを遺てる」や「言外に意味をもたせる」という要旨と適合するものでした。そこで、こういう理由があるので、たとえ彼の注釈の内容が荘子の本義に合わないところがあったとしても、それは「言外に意味をもたせた」ものだということで、容易に言い開きが出来たわけです。この理屈がわかって、はじめて郭象の政治論の内味も知ることができるのです。

三

郭象は「言外に意味をもたせる」ことをいっておりますが、彼がいう「無為」ということは、実は「有為」であります。また、いうところの「自ら生じる」ことも、既に存在している物質の作用を拒否するものであります。従って、彼は「大宗師」篇の注に、

所謂無為之業、非拱黙之謂也。所謂塵垢之外、非伏於山林也。

といいまする郭象の「無為」の意味は、人間が手を束ねて何事もせずに黙っていることではありません。それでは何なのか。郭象の考えは、無為とは相対的なことで、自らが為すべきことをするということなのであります。そこで、郭象は「無為」と「有為」との区別を「天道」篇の注で次のようにはっきり述べております。

夫工人無為於刻木、而有為於用斧。主上無為於親事、而有為於用臣。臣能親事、主能用臣。斧能刻木、而工能用斧。各當其能則天理自然、非有為也。

ここで、大工は木に彫りつけないが、斧の使い方に習熟している。つまり、大工は木に彫りつけないことでは無為ですが、斧の使い方に習熟していることでは有為なのです。つまり、郭象は政治のやり方としては無為を標傍するけれども、実際には有為です。ただ各々自分のやるべき事を自分でやればよいというのです。さて、「大工は木に刻ことには無為であるが、斧を用いることには有為である」ということから推察すると、君主は政治に対しては無為であるが、臣下を任用することにおいては有為であるわけです。郭象はこういった。各々が自分の為すべきことをすることを全て無為と解釈するのです。だから、「臣下は専ら政治の事をやるが、君主は能く賢い大臣を登用す

る。これは鋭い斧が木を刻み、大工が斧を用いるのと同じように、各々自分の仕事を自分でやることで、これは天道の自然であって、決して有為ではない[6]というのです。これによって、郭象の政治論の理想は「逍遙遊」篇の注にある「適性」（いわゆる「性による」）が学説の中心で、それは「物の本質に因循して、人の本性に適る」という意味と同じことであります。以上から、郭象の『荘子注』の要旨は、彼の政治思想の根拠にほかならないことがわかります。

「適性」という思想から考えますと、郭象は君と臣がそれぞれ自分の本分を守るという理想的な社会を望んでいたようです。それは彼のいう無為の政治の実現ということで、もしそうでなく、「君主が臣下の事を代って行うならば、それは君主の為すべきことでない。」このように君主が為すべきでないことをするのを郭象は、その君主を「非主」と名づけました。同じく、もし「臣秉主用」ということあれば、つまり臣下が君主の権力をにぎって官吏を任用したならば、それは臣下の為すべき職務内のことではない。このような臣下を、郭象は「非臣」と名づけました。要するに君と臣はそれぞれ自分の本分に安んじて、上下皆才能を尽くす、これが無為の政治ということなのです。このような論議はやはり「適性」の思想から発想されたものであります。このように郭象の『荘子注』は全てこの観点から説かれています。例えば「在宥」篇の注に

君位無為而委百官、百官有所司而君不与焉。二者俱以不為而自得、則君道逸、臣道労、労逸之際、不可同日而論之也。不察則君位亂矣。

といいます。また、「天道」篇の注では、

夫在上者、患於不能無為而代人臣之所司。使咎繇不得行其明断、后稷不得施其播殖、則群才失其任而主上困於役矣。

といっています。君と臣が本分を守ることが国を治めることのかなめで、本分を守ることが、則ち「無為」なのです。さて、郭象がいう「無為」は当然天下太平の意味を含んでいるわけで、もし君と臣が本分を守らないならば、それは天下を混乱に導くものなのです。郭象は西晋の乱れた時に身を置いて、「適性守分」の説を述べたわけですが、これは事によせて論議するものではありますが、少なくとも自分の体験から構想したものだといわなければな

りません。

四

郭象の君と臣が自分の本分を守るをいう政治論は、彼の「無為自然」の意味するところから考えますと、こうした政治倫理は先天的に用意されたもので、後天的に追求してえられるものではないとするようであります。つまり、郭象は後天的な追求、つまり作為は、社会的混乱を惹き起すもとだと考えるのです。従って彼は小さいものも、大きいものも、「性分」、つまりもちまえはすべて天によって決められていることで、大きいものは自らを誇るべきでなく、小さいものも大きいものをうらやむ必要はない。各人が自分の「性分」、もちまえを追求したならば、それは全て「分を守る」という要求に合致するのであります。それは「養生主」篇の注に、

天性所受、各有本分、不可逃、亦不可加。

ということではっきりいいました。則ち「性分」、もちまえに自足することは、天賦のことですから、人力で改変することはできません。もとより天賦のものですから、「孝悌」を慕うことも「賢者」を尚うことも意味はないわけで、ただそれぞれが、自らの本分に安んじさえすれば、一生精神を自由にすることができるわけなのです。そうではなく、ひたすら聖人賢者となることを追求したとすれば、結果的にただ骨折りをするだけです。そこで、人間の才能は天から賦与されたので、賢いものは一生涯賢く、愚かな人は死ぬまで愚かなのです。つまり人間は途中で変ることはないのです。こうした見方は勿論彼の自然観から展開したものであります。なお、彼の自然の意味は無為にほかならないので、「大鵬の九万里の高さにのぼることと、小鳩の楡や檀のこずえにやっと飛びつくことと、大椿の八千年を春とし、八千年を秋とすることと、きのこが朝生えてゆべに枯れること[7]とは、皆、天賦自然のもちまえのことであって、これはたとえ人間の力を使っても変えようはないのであります。このようにみてきますと、郭象の政治論は「そのまま現在の状態に安んじる」という社会思想、社会構造論だといえます。そこで、もし万物の種々のものを論すれば、その形態は千差万別です。しかし、もし万物の自然に受けた「性分」、もちまえを論す

れば、皆、才能があって、この才能を使って、自らの長所を十分に発揮しつつ生存しているわけで、そのままの存在の状態を変える必要はないし、またそれを変えることはできないのだ、というのが、郭象の理想的な社会組織、社会構造論なのです。ただ時代は不断に変化しつづけるわけで、そこで郭象の考え出した「性分自足論」とは、必然的に自分のことを自分でやればよいのだ、という点で、社会の相互関係から離脱することになります。つまり、実社会から離れてそれぞれが本分に安んじるという「無差別、無為の混沌世界」に進入してしまうのです。またこれは、実際政治の理想だともいえましょう。ところが、郭象は実際の政治にかかわっているわけで、彼の理想的な政治論を実社会に実行しなければならない立場におります。つまり、現実の社会秩序は守らなければなりません。上下階段にこえることは許されず、貧富貴賤はなくさなければなりません。ところで、貧賤富貴のことは人間のもちまえあって、「大鵬も小鳥より貴いわけでもなく、小鳥も天の池まで飛んでゆく大鵬を羨む必要ない」[8]のです。換言すれば、郭象は君臣、上下、貴賤、貧富という対立は自ずと存在し、それぞれに機能してい、この間がらは、いかなる者でも弁別することはできません。このように各々が自己のもちまえに従って生きてこそ万物は、真の自由に到達することができるとするのです。いったい郭象がこのような見方を示した理由はなんであろうか。恐らく一方では、当時の思想傾向の影響を受けつつ、一方では、自ら要路にいて権力をにぎった彼の行き方がこれを説明するものと思います。

五

要するに、郭象の政治思想は、人間がその生まれつきの性のままに満足すればよいという「無為、自得」によって、人間の相対的な差別を消失させ、そのうえで絶対的な自由自在の境地に到らせる。つまり、郭象は「大きいものも必ずしも余裕があるではなく、小さいものも足りないわけではない」[9]という万物斉同の見方から、彼の理想的な政治社会を構想したのであります。

〈注〉

(1) 晋書巻五十、列伝第二十に、

郭象字子玄、少有才理、好老荘、能清言。太尉王衍毎云、「聴象語、如懸河瀉水、注而不竭。」州郡辟召、不就。常閑居、以文論自娯。後辟司徒掾、稍至黄門侍郎。黄海王越引為太傅主簿、甚見親委、遂任職常權、熏灼内外。由是、素論去之。

というのである。

(2) 晋書巻五十、列傳第二十の庾敳伝に

（郭）象後為太傅主簿、任事専勢。敳謂象曰、「卿自是當世之才、我疇昔之意都已盡矣。」

というのである。

(3) 郭象の『荘子』「逍遙遊」篇の「鯤、鵬」の注を参照。

(4) 郭象の『荘子』「逍遙遊」篇の冒頭であった「鯤、鵬」の説話の注を引用したのである。

(5) 陸徳明の釈文序録を参照。

(6) 郭象の『荘子』「天道」篇の注を引用したのである。

(7) 『荘子』「逍遙遊」篇を参照。

(8) 『荘子』「逍遙遊」篇を参照。

(9) 郭象の『荘子』「逍遙遊」篇の注を引用したのである。

※ 本稿は、平成二年度九州中国学会（琉球大学・四月二十二日）においての黄錦鋐氏の講演を翻訳したものである。